

書棚の上に想いも載せて

野口 悠さん
書店員

理工
のち
野口
JUNKUDO

「生きがい」や「働きたい」。
そんな言葉がふさわしい人に出会うと、
なぜか小さな勇気を
もらったような気持ちになります。
このコーナーでは、私たちの身近なところで、
そうした思いで働いている方々を
紹介していきます。

第6回
将来へのまなざし

昨年、国内で出版された書籍は7万7417点[※]。単純計算でも、大型書店には毎日2000点以上の新刊本が届けられていたこととなります。この膨大な数の書籍を1冊1冊手に取り、陳列の仕方などに工夫をこらしているのが書店員。今回は、ジュンク堂書店新宿店で理工書を担当している野口悠さんにお話を伺いました。

●理工書棚との出会い

「理工書って、建築、自然、環境、農業、数学、物理、宇宙……と、分野がとてつ幅広いです。私は学生時代から理数系が苦手で、書店に行っても理工書の棚など見たこともなかったのですが、入社前の研修期間にいろいろなジャンルを回ったとき、理工書がとてつ魅力的に見えました。分野が広く、実務書だけでなく、読み物として面白そうな本も置いてある。これは工夫しがいがあると思ひ、配属の希望を出しました」

理工書担当となった経緯をこう語る野口さんは、書店員となつて2年目。ジュンク堂書店では原則担当替えを行わないため、理工書のスペシャリストとなるべく日々勉強中と言います。

「書店員は、経験の差、知識の差がすごく出る仕事だと思ひます。毎日どんどん新しい本が出てくるので、ここまで覚えれば完璧と言ふことはありませんが、そうした終わりがない部分も、この仕事の面白さと言ふえるかもしれません」

●楽しくて難しい棚作り

店頭や電話での問い合わせ対応、本の検品や陳列、棚のメンテナンス、発注、レジ、出版社の営業担当との打ち合わせなど、書店員にはさまざまな業務がありますが、書店を利用する側として特に気になるのは、本と出会う「棚」がどのように作られているかということ。

「棚作りで売上げもだいぶ変わつてくるので、いろいろ考えながら陳列しています。例えば、売れそうな本や自分がいいと思つた本は、お客さんの目線の高さにある段に、表紙を見せる形で並べますが、隣にその本を選んだ人が次に読みたくなるような本を置けば、まとめ買いをしてもらえらるかもしれない。そうした相乗効果は結構大きいので、同じ列にはテーマが関連する本を並べるようにしているんです」

しかし、ときには売れそうな本と野口さんおすすめの本がバッティングす



ることでもあります。同じ分野の本でもテーマが違っていれば、一番目立つ場所に置けるのはどちらか一方。その場合は？

「それが難しい。でも売れそうな本は分野ごとの棚のほかに、話題書のコーナーなどでも並べられるので、私は自分がおすすしめしたい本を優先させています。地味でもいい本は、どこかで目立たせてあげたいから」

お話を伺っていて驚いたのは、こうした棚作りや書籍の発注についても各ジャンル担当者に一任されており、また、先輩からの指導もごく最小限であるということ。

「うちの書店はかなり自由。入社の際から『仕事は見えて覚えるもの』と冗談っぽく言われていたので、私もそういうものかと(笑)。だから、最初のころは他書店を見に行って参考にした。今でもいろいろな人の棚を見て、いい部分はどんどん取り入れています。あと、独りよがりな棚にならないように気を付けています。売上数字を見て、お客様のニーズに合っていないようなら陳列を変えてみたり。そういう意味では、棚は書店で働くスタッフとお客様との合作とも

言えると思います」

●悔しさもバネにしなから

書店員の仕事には情報収集も欠かせないと野口さん。出版物は通常、出版社→取次会社→書店の経路を辿りますが、それ以外に、自分で新しい取引先を開拓することもあるそうです。

「情報は他店舗の理工書担当からもらうこともありますし、外出先で見つけて、うちの店に置けないか問い合わせることもあります。例えば『いのちの食べ方』という屠畜^{＊2}を扱う映画が公開されたときには、屠畜をテーマに大々的なフェアをやりたいと思ひ、一緒に映画のチケットやグッズも扱えないかを自分で交渉しました。このときは、お客さんの反響もよく、うれ

しかったですね」

棚とは別に、レジ横の平台(平積み書籍を置く所)などのスペースを使って本を紹介するフェア。その企画や準備も書店員にとっては大きな仕事の一つです。野口さんが今も一番思い出に残っているのは、自身が初めて担当したフェアとのこと。

「建築発想法をテーマにしたフェアだったのですが、全然いい本が集められなくて。選書した本を並べて見ても、自分で言うのもナンですが、まったく面白そうじゃない。お客さんの反応もよくなって結構落ち込みました。何度かフェアを行ううちに選書にも慣れ、最近は自分が力を入れたフェアは結構いい結果が出ていますが、あのときのことを思い出すと今でも悔しいです」

そんな思いもバネにしなから、書店員として着実に経験と知識の幅を広げてきた野口さん。最後に、おすすめめの書店活用法を聞いてみたところ、書店内散歩という答えが返ってきました。

「私の場合もそうでしたが、普段行かないジャンルの棚へ足を運んでみると意外な発見をすることがあります。理工書の棚にも難しいものはかりでなく、奇抜な建築物を集めた面白い本などもありますし、時間があるときには、ぜひ書店の中をゆっくり散歩してみてください」

*1【出典】全国出版協会 出版科学研究所「出版月報」2008年1月号

*2【屠畜】牛や豚など食肉用の家畜を殺すこと

